

光明第二十三号

□ 一切の我同胞たちよ、大正十年は、歡喜の内に、私たちの前に現れて来ました。お目出度うございます。一年の内に、私たちに、如何に悲しみが湧いて来ようと、辛かろうと、新年に私たちに与えられた生の祝福を思います。朝になつたら新しい生命の輝きを見る様に、新年には又、私たちの生命の強い緊張を覚えます。私たちが古い不快な記憶や生活の痛みからぬけ出でて、全てを新しく鮮かに、強い生命の自覚と、新しい向上を思う時、千里はてない広野に立つた偉大と、はかり知れぬ希望への憧憬をおぼえます。

□ 時は私の経たていとです。永劫よこいとより、永遠とこしほにのべられた、時。この年一年もその途中である。それに織よこいとられて行く緯よこいとは、私たちの思念です。仕事です。一日二十四時間、三百六十五日、美しく、優しく、正しく、生命の最善の力をなげつけ、生命の織物を織つて行きたい。私だけに織られる私の織物は私にとつては至上の貴さがあり、限らない輝きがあります。私たちの生活が誠であり、真剣であり、勤勉であるなれば、私の織物は、よしそれが麻であろうと、木綿であろうと、毛であろうと、それは、即ちかけがえのない偉大です。

巻頭の叫び

□ 「どうかなるだろう。」その気分。墮落の第一歩である。

自分の現在に希望もなく、憧れもない。ただ他人にひかれ、境遇に支配されて、毎日暮して行く、動物の生活である。醉生夢死である。

悲境に出遭い、艱難に出遭つても、自ら艱難を突き破つて、前途に横わる光明を見出そうとはしない。どうかなるだろうと言って、自分の力を試そうともしないで、すぐ人に頼ろうとする。真実の自分を見つめたこともなければ、自分の道は自分だけにしかわからぬことも知らない。三叉路に立った時には、他人が何か言ってくれるのを待っているか、神のお告げをきいたり、みくじをひいたり、八卦や運勢判断に頼る。神を拜んでも、自分の至誠を神に誓うのではなくて、自分勝手なお願いをする。神は、人間の誠、人間の働きしか見とめないことを知らないのだ。彼らの信仰は、自分の生命と、至上絶対との交通感応ではなくて、極楽参りの安買いなのだ。

どうかなるだろうと言って暮らせば、涙の出る様な感激もなければ、徹底的な願ひもない。奮発もなければ努力もない。運がよい運が悪いと毎日の様に言われる。都合よく事がすめば、運がよいといい、金儲けが悪ければ、運が悪いのだ。自分の不注意でお金を棄てても運が悪いのだ。精励奮発十年間、寝食忘れて、十万円積みあげた人を見たら運のよい人と言っておく。運とは人間の全力をなげつけたその後に於いてのみ見出されることを知らない。

「どうかなるだろう。」それで今日も暮し、今年も暮し、一年を暮す。どこに人間らしいところがあるだろう。私たちは「どうかなる」と言つて、運命にあまえていてはならない。全ての力を出して突き進むのだ。突きあたるのだ。ぶつつかるのだ。「どうにかなる」と言つて未解決のままほつておかないのだ。虚偽のままほつておいてはならない。私たちの一生は何時おわるかも知れない。「どうかなる」と言つて引きずられていてはならない。キパッと、私自身のほんとの生活に立ち帰らねばならぬ。その時私たちはほんとの人間なのだ。

逆境のどん底から (ほんとの喜びは)

□ 私は人間に生まれたことをうれしく思っている。この世ほど懐しいものはないと思っている。けれども私は人生が楽しいとは思わない。生きたい生きたいと願っても、楽しまれるからではない。私は一年一年、この世のたつて行くのが何よりも早い、そのあわただしさに泣いたほどだ。そして私は、あまりに早く死なねばならぬことを辛いことだと思っている。そんなに人生に執着しても、それは人生が楽しいからではない。私たちは、年一年と、重荷を負って行かねばならぬ。私の周囲には、年一年と、辛いことが増して来る。私は益々生の苦しみを感ずる。

私たちが真実に生きようとすればするほど、私たちの周囲が気にいらなくなる。世の中の偽りの生活が私を俗化しようとする。私を伸ばそうとすればするほど苦しい。私は人生が楽しいものだとは思えない。苦しいもの、寂しいもの、悲しいものだと思っている。私の霊は、酒に酔って楽しむのには余りに自分自身を見つめすぎている。他人が上調子になつて騒いでいれば、私の生命、その中に通る悲哀をくもつてゐる。

私は幸福や楽しみを追うことには飽いたのだ。ほんとのところ、私をほんとうに育てるものは私の悲しみだと思ふ。「私はたった一人だ」という寂しみからだと思ふ。私たちを引きしめてくれるもの、私たちを厳肅な信仰生活に入らせてくれるものは、私たちの悲哀や、寂しさだと思つてゐる。

□ どんな悲痛も、どんな逆境も、どんな寂しみも負つて行くことの出来る私になりたい。それが私の望みだ。キリストにしても親鸞にしても、全ての悲痛や逆境や寂漠を忠実に味わつて、それによつて、あの偉大な人格や、信仰を建設うちたてることが出来たのだ。全てを呪い得ない、自分を呪う者を呪い得ない、その心が生まれるまでには、どれだけ彼らが辛さや苦しみに耐え続けたことだろう。

私たちは、苦しさをさけようとしてはならない。寂しさを何かでまぎらそうとしてはならない。私たちを引きしめて、厳肅に、苦しきの中に、我自身を見つめねばならぬ。私たちが、悲痛のどん底に立つて、「おたつた一人だ」と思ふ時、ほんとに大きな大きな何かを得るのだ。

私が、一番ひきしまった心をもつことの出来るのは教壇に立つた時だ。私の一挙手が、一言葉が、子供たちに不断の何物かを与えると思ふ時、相済まぬ様な気がしていけない。俺はお前らの先生だ、という心になれない。赦してくれ、お前らこそ俺を育ててくれるのだ、という気になる。私が教壇に立つたとき、彼らを威圧する気にはなれないで、先に涙が流れる。私は、私の子供がしていることだけは、呪わないでもすむ様になつた。子供たちの内には、私を信じ得ないために、私を悪人にしたり、私を呪つたり、私を罵つたり、時には、彼らの満足のために私を世の中に売つてしまうものさえ出来る。その度に私は迷惑する。悲しいことに思ふ。けれども、私はそんな子供を憎み得ない。いや私はそんな子供こそいつも忘れ得ない。私のすることに疑惑を持つ子供こそ、あるいは真実を求めようとするほんとの人間になるのかも知れない。

い。私は、私自身に叛く子供をすぐ悪人にする事が出来ない。私の言うことに盲従する子供よりは、私を理解しようとする子供がほんとは、より多く、天才的な、人間らしい子供かも知れない。

□奥様（不町工家）貴女は、信仰問題で苦しんでいらつしやる。お家にも色々ほんとお気の毒な悲しい事情がおありの様です。二つの問題で苦しんでおいでの様です。御同情申し上げます。貴女は御自身でも精神大病人とおつしやる。御寺の僧侶の方からは気狂い同行だと言われておいでです。僧侶の方からも、あんなにひねくれてとか、宿善が至らないとか言つて突き放され、鬼の様な人の利己主義のために苦しめられておいでです。

貴女は悲哀の寂漠のどん底にお立ちになつたのです。私は、手つとり早く早合点した信心や、ある所に腰を下した信心や、信仰は信仰、世渡りは世渡りだと二重に暮しても平気な信心よりも、貴女のその飽きたらない心、世渡りと信仰生活とが別々になることをお歎きになるそのお心の方が、近道ではないかと思つています。貴女のほんとの光明は、全てにつきはなされた今の貴女の悲哀のどん底から、その貴女の純な態度の中にほんとのものが生まれて来るのです。どうか、親鸞の型にはまらうとなさいますな。その悲しいたつた一人の貴女の生命の内に天籟てんさいの響きをお聞きなさいませ。

□ 人間のほんとの生活は力ではなくて愛なのだ。宇宙一貫の生命は、力ではなくて愛なのだ。けれども、社会は、愛の団体ではなくて、力の団体となつた。金力。権力。4 学力。全て力で動くものと思つている。人間たちはその力に苦しんで来た。特に近來、文明は物質を基本にして立てられた。人間たちは血眼になつて力を得ようと戦の様な生活が続け出した。生存競争などと悲痛な言葉さえ出来た。「金を得よ！」「名譽を得よ！」「位を得よ！」「権力を握れ！」それがこの修羅の様な世界に住む人間たちの守本尊であつた。青年の標語であつた。

法律も宗教も道徳もこの力を得る方便に過ぎない。「偽を言つてはならない。」何故かと彼らに問えば「信用が得られるから。」「信用を得たら？」と問えば「信用があれば金儲けが出来るから。」と、きつと金儲けがつけ加えられるだろう。愛の生活には誠でなければならぬ、信用がなければならぬというのではないのだ。政治家と言えば、権力を握る争いをしてる人にしか見えない。何とその政見発表の演説に陥穽と詭弁と野卑な攻撃の多い事よ、国民的愛を建立しようとしていくれるのだろうか。彼らが、力を得んがために戦つている様を見よ。力の弱い、戦いに疲れ傷ついた人間たちがころがつている。恨みの記念塔や憤怒の石碑が一ばい立てられてる。村を見よ、どこの村に行つても、権力を弄んだ人間たちのいきさつのために、純朴な村民たちの苦しんでいないところがあるか。力を弄ぶ人間たちのためには、無形の血が流れ、生きてる屍が山と積まれる。

力を信ずる人間たちよ。「何、世の中には、金の力、権力で動かない者があるか。」と通して見る事だ、豚の様に卑しい人間、猿の様な狐の様な愚なそして小智慧のきく人間、芸娼妓の様に、腐つた墮落した人間は、その力の前にかがむかも知れない。け

れども、匹夫も心を奪うべからずとか。純真な人間を全て力で征服しようとしてみることだ。出来るかどうか。よし又出来たにしても、力以上の世界がほしくはないか。愛の感激の世界が欲しくはないかどうか。女の体を買得るだろう。酒池肉林を買得るだろう。けれども、その愛を買得るか。肉以上の世界を買得るか。権力で盲従や屈従を取り得るだろう。けれども、尊敬の伴う服従、否、愛の世界を受け得ることが出来るか。

世界は争闘に疲れて来た。到るところに、力に傷つけられた人間の墓場が出来た。私たちは偉大なる殉教者がほしい。立つた殉教者も立つた殉教者も、彼ら、力の人間たちのために葬られるだろう。けれど、私たちは昔を見る。徳川幕府は十五代にして倒れた。徳川幕府を倒す勤王の声は、五代將軍綱吉の時代にあげられ、その声は、社会の底を流れて、ついに、九代將軍家重の時、尊王家竹内式部によつて、幕府を倒せの叫びはあげられた。式部はすぐ罰せられた。けれど、続いて、山県大貳、藤井右門の二人によつて、一層強く叫ばれた。二人共に刑場の露と消えてしまった。三人が倒れて事がすんだであろうか。彼ら三人の死は更に数十数百の式部や大貳や右門を生んだではないか。

弱そうで強い者は殉教者である。一人のキリストを十字架にかけて安心したユダは、その後に幾億のキリストが生まれることを知らなかった。偉大なる天才、キリストや釈迦や、親鸞や日蓮を生む前に、民衆は天才を造るために目覚めねばならぬ。否、より大きな殉教者をつくる前に、私たちはまず殉教者でなくてはならぬ。正義のために討死しなくてはならぬ。私の妹たちよ、汝らを誘惑し、汝を力によつて弄ばんとする男と戦え。汝の肉が力によつて汚される前に、汝らは清く討死していなければならぬ。それは決して犬死ではない。その後にはより偉大な殉教者によつて戦われるだろう。

私たちが悲哀のどん底に立った時、信仰—それは最上の愛の生活—によつて救われ、民衆が悲痛のどん底に立った時、その悲痛が生む天才的な殉教者によつて救われる。その昔、奴隷はリソカーソによつて救われ、フランスが敵軍の兇暴にふみにじられようとした時、オルレアンの少女ジャンヌダークの天使のやうな現れによつて救われた。

□同胞よ、私たちは、逆境や悲痛のどん底に立つことを恐れてはならない。私たちが逆境に立たせられることは、私たちに目覚めよの警鐘を聞かされるのだ。私たちが苦しさを徹底的に耐え忍ぶところに、私たちの光明は見出され、そしてそれがひいて人生を美化し浄化する強い礎となるのだ。

□私たちは教師であり、看護婦であり、農夫であり、実業家である前に、まず人でなければならぬ。父であり母である前に人でなければならぬ。私はただ人間であつたらしい。人間たらんとする前には自覚を要する。そして、自覚は信仰を生む。信仰は人生全体である。信仰は愛である。愛は人生全体である。私たちの信仰は、酒の中に

生れない、
生れる。
歓樂の中には出て来ない。
悲哀のどん底に、
煩悶の唯中に、
涙のその中に

万人の火鉢

□ 私の生家は、山県郡原村、龍頭山を南に受け、寂しい山里に、西南にむけて立てられている。けれども私には、この寂しい山里の家が一日も忘れられた事がない。この家には、年老いたる父母と可愛い私たちの弟妹が住んでいるからだ。私は時々疲れた霊と体とを持つて、この家に逃げこむ。そしてその度に、絶対の平和と、純真の愛とを感ずることが出来る。私たちの家庭の平和は、私に恵まれた最大の恩恵なのだ。夜十一時十二時まで炉の側でかわされる話は何だろう。私たちの信仰である。歡喜である。尋三の妹を最小に、弟妹たちが、「兄様おかえりしました。お難儀で…」の声を聞いた時、私は「おお俺はお前たちのために生きてやる。お前らばかり泣かせはしないぞ」と涙ぐましい心地になる。私の家庭には、利己による争いはない。礼儀によって愛の深さを加えている。酒に酔って夜おそく帰って来た父の少し変な言葉で、第一に聞かされたのは、「兄（私のこと）は帰ったか。」第二の言葉は「お前たちは兄さんにお言葉を言ったか！」のそれであった。家庭の平和は、私たちの第一の誇りである。田は無くなるかも知れない。家は焼けるかも知れない。けれど、ただこの愛の世界のみは如何なるものも亡ぼし得ないだろう。

□ 私たちは孝を説いている。けれど孝は教え得べきものだろうか。楠正行の孝は正行の孝である。私の孝は、第三者によって、教えらるることによってのみ出来るだろうか。私の孝は私の親によって生みつけられ、恵まるべきものではあるまいか。7

親の絶対愛をそのまま受け入れる心、即ち孝である。純真愛を注がずして子を育てている親たちに、その子に孝を知らしめない罪はないだろうか。不義によって生れた子供が、暗から暗に人手に渡って、冷酷無慈悲に育てられたときに、ほんとの人間が出来るだろうか。遊蕩のために悪い病にかかって子に遺伝せしめ、妻に伝染せしめた父親にも、孝を強うる権利があるか。人の子は、孝を説かれ、孝行を強いらるべき前に、その親たちの間に、ほんとの恋愛生活があり、その間に湧き出した絶対愛を以て、人間らしく育てられていなければならぬ。でなかったならば教育は徒労におわる。私たちは父たる前、母たる前に、ほんとの人でなければならぬ。人であつてはじめて、その子たちによって孝を捧げられるであろう。私はこの意味で、私の親たちに朝夕の感謝を捧げる。

□ 私たちの職員室は、愛をもつて団結された最も進歩した家庭でなければならぬ。私たちの職員室は、四月以後ことごとく、新しい人をもつて造りかえられた。けれども皆は精神的樂園の建設者である。私は、それらの方々に對して有難いと思つて、感激の中に暮している。私たちは助けあつてゐる。慰めあつてゐる。指導しあつてゐる。デカタン気分の人がない。ひねくれ者がいない。横着者がいない。反逆者がない。私たちは毎朝集まるのが愉快である。私たちの仕事はこの生活から生れ出るのだ。

部下の職員たちはなまけようとする、校長は冷たい目でらんで校務細則によつて拘束しようとする。固い古い意見で専制政治をしようとする。そこには必ず権力によつて威圧された墓場のような生活が生れるか、反逆を企てられる呪いの生活が出来るかするのだ。私たちが精一ぱい勤勉であり、責任を重んじ、相互に助けあい、規律を尊び、礼儀を守り、人格を尊重するところに、校務細則も何も超越した自由が生れ、働きたい感激が生れ、私たちは愛によつて結ばれる。私たちの有する職員室がそれだと言いたい。

□我たちの造る団体は全てを愛をもつて充実させねばならぬ。ただ私たちは、羊の群の様な盲従と、卑怯をもつて、権力に屈した人の団体を理想境と思つてはならない。自分を殺して、団体のために、殊更平和を造るのではない。私たちが真実に生かすことによつて、目覚めたる自由の生々とした団体をつくるのだ。労働者たちによつて呪われている、いわゆる温情主義は、一人利己のために造られたる方便としての温情主義である。私の求むる愛の理想団体は、戸主の便利、校長の勝手、中隊長の名誉のため、故意に造られたものではなくて、全員が真実を表し、人格を尊重し、その誠を信じあつた、私は私でここに私の全体を働かすことが出来、彼は彼で、これが私の生すべき所という感謝と希望との生活が出来る集りでなければならぬ。

私一人が怠惰であるならば、私一人が虚偽であるならば、私一人が高慢であるならば、私一人が冷淡であるならば、私の住む全ての社会は、そのために、その愛の生活を傷つけるであろう。

私は、私がいるために、私たちの造っている社会を温かくしなければならぬ。そうだ。万人の火鉢でなければならぬ。

播磨前校長先生に

校長先生、私たちは幸福でした。しかし辛い幸福でしたね。私が大正五年の夏本校に来てから、今日まで一緒に暮しました。五年間、長い様でも短い時でした。初一年、そして二年、私たちは平凡でした。あなたはただ校長であり、私はただ首席訓導でした。けれども、年がたつにつれて、私たちは加速度をもつてジワリジワリ何かしら近よつて来ました。そして、私たちが今度お別れしなければならなくなった時、校長とか、部下とか、そんな距てや心持ちは全く取り去られ、二人がぴたり合つていたことに気がつきました。自由を喜ぶ私、愚鈍な私を、よくも可愛がつて下さったものです。

校長先生、十二月二十一日、転任がわかつた日からは、私たちはお互に年にも似合わない人目のいやなほど涙の子でした。二人で静かにしていれば、どうしても泣いていました。「理性ばかりで生きたい。感情の衣がぬぎたい！」とあなたは言いました。「強くなりましょう。私たちはこんな弱い人間ではなかつたはずです。こんなに泣くはずはないのです。私たちは酔っているのでしょうか。」と言つても、言いおわらぬ内に新しい涙にさそわれています。「泣きたい時には泣きましょう。どうせ人間は、私たちを温める感情の火で、私たちの体を焼くのです。悲しい時には泣くより外ありません。親鸞の願いも、そして救いも、ここから出たのではありますまいか。」などと言つたりしました。

私たちは、二三日の内にやせてしまいました。私にはどうしても眠られない夜など9がありまして。夜中に外に出て歩いて、静座しても、私の心は落ち着かないのです。一夜の中に気味の悪い夢を二三次結んだだけで。佐々木先生が「あなたまでその様では」と言つてくれても、食事も三ばい通らないのです。

校長先生、私たちは議論もしました。我の通しあいをしたこともありまして。けれども、そのために私たちの感情を傷つけたことはなかつたのです。「あなたがする事を見て、あんなことをするから、こんなにしてくれそうなのだ、と思つた」と言われても、「そうでしたか」と、それでもう一層二人は近よつていました。私たちは信じあつたとも言うものでしょうか。随分と辛い時でも二人で忍んだり、突き進んだものでした。「校長先生と一緒に私の出世なんかありません。私には生きる道はわかつています。何年でも、一生でも、犬馬の労をとりますよ。」と私は口癖の様に言つたものです。私の飾つた言葉でないことは、あなただけは知つて下さるのです。私たちは飾りあつた言葉を出しあつた事はないと思ひます。飾つた言葉は出し得ないのです。私はずつと前頃には、何か仕事が出来上つた時「御苦労でした。」と言われなくても、私のしたことがなくなつたという様な寂しい感じがしたものです。けれど今頃の私はこんな苦しみから遠ざかることが出来ました。

校長先生、私は「狃^なれてはならない」、それが私の信条でした。「狃^なれてはならない」ということと、「信じあう」とか「親しむ」とかいうことは、両立の出来ることだと思ひます。狃^なれない親しみ、それがほんとの信だと思ひます。人間が狃^なれあうのには、酒にかぎります。酒は何よりの近道です。けれど、私は酒で人の親しみは感じませ

ん。酒のある間だけの泡沫であります。酒の力なんか借らないで信じあつたのが、ほんとの親しみでなくてはならない、私は、それだからと言って、窮屈な思いをしたことはありません。

酒はいけない。酒はいけない。私たちは何時も言っていました。私たちだけの生活には酒を使いませんでした。職員の仕事や送別にも、もう近い内、酒を使ったことはありません。私たちは、祭にしても年始にしても、平常生活にはもちろん酒を使つてはいけません。万人皆、酒がいけないかどうか、それはわからないことです。ただ私たちは、酒によつて、何でもない、一時の虚偽の空気を味うことや、酒のあとでの精神の荒みようや、などにはたえられないのです。私は、何時かも、酒によばれて、酔つた自分が覚めるにつれて、一夜中、寝間の上で私の心と戦いつづけて苦しんだことがありました。私たちは、今度あなたを送るのにも酒は使わないですまします。酒の勢いなんかからしないで、私たちのほんとの生命の接触の方が、どれだけうれしいか知れないと思います。

校長先生、二十三日でしたか、今日はもう平気でいたいと思つて、職員室に出ました。けれど、他の先生たちが教室に出て行つた後で、あなたが、「今度送別の式でも何でも、あなたが司会者に立つて、何を言う時でも、どうか通り一ぺんのことを言つて下さい。あなたが言つてくれる一言葉一言葉は、私は苦しい。私の心の奥がさされる。どうか私の見苦しい様を出させない様にして下さい。」と言われた時、私は、又悲しい私になっていました。私は教室に出ても、ともすれば涙ぐましくなっていました。

私はその前の日のことが思い出されます。火の消えかかった火鉢の側で、無言で苦しんでいる時、某が来て、「えー私たちの最も敬慕する校長先生には今度……」と演説口調で、長い挨拶やら賛辞やらがならべられた時、あなたは初は声が小さかつたが途中からは笑つていました。後で「やれやれ助かつた。あんな人が来て、あの様に言つてくれることが有難かつた。聞いていて、悲しくもなければ、平気で他の事さえ考えしておられた。」と言いました。「あなたが言つてくれることは、弱い見苦しい私を人に見せる、どうか、私の心を察してくれな。」と思いくらべて、私が涙の人となつたのです。

「留任運動なんか駄目でしょうな。」などと、わかりきつたことを真面目に言う人などが続いた時、あなたは「飽いだ、飽いだ、もうわしは人の偽善にあいだ。」と言われました。「君、送別会などと心配してくれるな、世の慣例を僕にあてはめたり、義理やつきあいのために来て下さる人などには、その人にも迷惑だし、私は偽に苦しまねばならぬ。ただ子供が送つてくれることは、よし、彼らが喜んで送ろうが歌つて別れようが、彼らの天真がさせることだ、私は喜んで受ける。」とも言いました。

多くの人の内には、私たちが新しい涙にさそわれる様な方もありましたが、私たちはそんな人で満ちていようと思つてはなりません。見えすいた様なお世辞がならべられても、それは世の慣例がさせたことです。心からの惜別の情のない人は、ない様にしていたら、「虚偽よ!」と言つて、いやな思いをすることはないでしょう。けれど、これも、世の中には口先のお上手にすら得意になったり、失望したりする様な、

暁烏敏さんのいわゆる「死の国々の運命国」の人たちがいて、自分を人の言葉によって証明しようとする哀れな人たちが満ちている世の中が生んだのです。一つの口から二重に言い得る人たちの「死の生活」を悲しんであげたいと思います。

校長先生、私たちは毎日泣きつづけました。けれども、それは別れが辛い悲しみでも何でもなかったのです。「私は、こんな重荷を負わされて、お互に歩まねばならない。辛いことだ。」といった様なことや、「私たちの精神王国は完成された。」という様な気分や、「私は教え子にすら叛かれた、多くの人は信じなかった。けれど私たちは信じた。」そんな心地に、別れるということによつて、一時に、感激の火が火附けられたのです。人間は、空気の清い中に住んでいる間は、その有難味を知りません。煙の中に立った時、清い空気を思います。三十前後の私たち、会つて別れることぐらいは知っています。二里位離れるくらい何でしよう。

校長先生、私が一番うれしいことは、校長先生が「人生は信仰だ！」と言いはじめた下さつたことです。数年前、まだそんなことがお耳に入らない頃、真暗な職員室で、私一人が生命の永遠を語つても、御聞き下さらなかつたことがあります。それ以来、直接に信仰の話にふれることをさけていました。けれど、最近、先生のお身の上におこる全ての事は、「信仰のための鐘の響」と見えて来て、私たちが別れねばならなくなつたこの頃、「信仰生活が、私を救う。」ということをお悟りになつたことが、如何に校長先生に対する敬慕の念を増したことでしよう。お内の打ち続いている御病人やら、あなたの御病氣やら、その外、種々とお辛いことでした。けれども、そのために人生至上の何物かをおつかみになつたことが、現実の泡沫の様な幸福より如何に大なるかとお考え下さい。よし、私たちに、毎日毎日、涙の生活は続いて、それは奥様のいわゆる「この一冊を得るまでの長い長い道行きでした。」と、その真の生活の一步一步の建設です。校長先生の、何事にも熟慮断行なさる、そして、真剣に、確かに、根強く歩まうとなさる御性質が、内的生活に向けられたことが、如何に崇高いかを思う時、新しい涙が湧いて来ます。

現代人の虚偽の生活よ！ 私たちが叫ぶ時、又しても、世の中の安価な因襲や、俗的な第三流の生活者のつまらない仕草が、心を痛ませます。真実に生きることはどうも難しいか。酒で粗末に生きられる人間、俗歌で楽天的に暮される間の人間、人の裁きで自分を生かしたり死なせたりしている人間たちの生活が、氣の毒にもあり、羨ましくもある様な気がします。

校長先生、いくら書いてもつきないでしょう。もうこれでおきます。私たちは高木校長を迎えました。私たちのいる間、私たちの学校は私たちの樂園です。あなたの行かれる中原校も亦、いよいよ新しい時代の理想郷たらんことを祈ります。(二月五日)

青空を仰ぎ得ざる人よ

他人を裁く前に

「運命だ」と言ったり、「世間体が悪い」と言ったりして、何でも人からおしつけられて動いている人間たちほど、一番よく他人の事を「良い」とか「悪い」とか言つて裁きたがる。自分の内面の生活は少しも顧みないで、他人のことばかり、「善い」とか「悪い」とか、朝から晩まで裁いている。ほんとのところ、人間を裁き得る者は神ばかりだ。紙一枚すら、その表と裏とを一度に見得ない私たち、箱一つすら外と内とを一時に知り得ない私たちに、どうして他人のことを裁き得ようぞ。

他人から聞いた話、人から人に流れ流れた話で、すぐ話の本尊を悪いとか善いとかに定めてしまうことが、人間たち出来るだろうか。裁くことが人間なら、裏長屋の女たちは第一等の人間だ。私たちは、人の噂などや、ちよつとした観察で、人を品定めしているが、善良な人を悪人と裁いて、人一人、精神的に社会から葬つたとすれば、その人が善人だとわかつた時、私たちは如何にしてその罪を償うことが出来ようか。

『光明』を見て涙を流した人が、私のしたこと（その人たちの悪いと思うこと）が骨組がかえられ、肉が加えられ、着物を着せかえられて、その耳に入った時、「あんな人が、やれやれ、つまらん、『光明』読むのが有難くなくなつた」と言つたそうだ。私は私のしたこと（言いわけもしない。悪いことだとも思わない。私には真実の求めであつたから。けれども、どうせ、そんな人の世の中よ、流れた涙も偽りなら、その人の生き方も偽りだ。そんな人は今にも光明団を出てくれても、おいしい人を失なつた、残念な、とは思わない。「ああ、」と何かしら溜息が出て、別な涙が浮ぶだけだ。いやでも「いや」と言い得ない。信じないでも、「信じない」と言い得ない、疑つても面と向かつて質し得ない人たちの、浮草の様な生活と羊の様なお人好しが気の毒だ。

ある教え子

ずつと前に、教室の外に、神士みたような青年が立っていて、僕を呼んでいる。それは五年前に私の教えた子供であつた。私は彼が何しているかを知らなかつた。彼は言いにくそうに言つた。

「私は、今、その○○で朋友と二人で酒を飲んだのです。ほんの通りがかりで、私はちよつと懐中無一文です。勘定が出来んです。イソバネスを脱いでおこうかと思つたのですが。私はちよつと体裁をつくらうたいのです。すみませんがちよつとお金を貸してくれませんか。」と。

小使いの持つて来たお金は彼の手に渡された。彼は逃げる様に去つた。私はお金は彼にくれてやると思つた。けれど大きなことをした様な気がした。私はトルストイが三十銭のお金を一日中持つて歩いたが施す者が見つからなんだという話を思（以下原文欠）